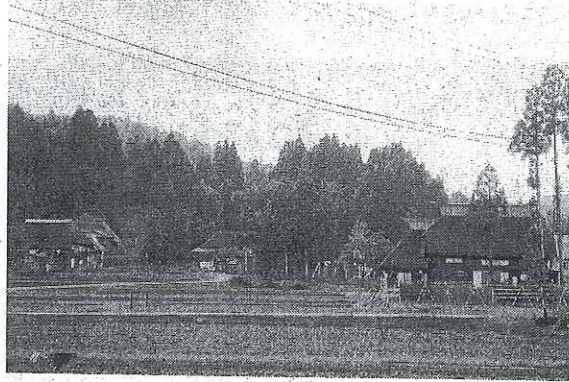


新潟移住

人口減とどう戦うか

■上



新潟県小千谷市の芹久保集落は現在、4世帯ほどしか残っていないという。それでも、市が住民に退去を求めるとはならない。行政の効率化のために集落を統廃合するより、それぞれの集落が持つ歴史やその風景を、地元住民の思いと共に残していくことの方が大切と考えるからだ。今回、同県の小千谷市と柏崎市が県と共同で取り組んでいる「交流・定住促進政策」を取材する機会を得た。加速する人口減少問題に地方はどう取り組むべきなのか、そしてそこから見えてくるものは何か、報告する。

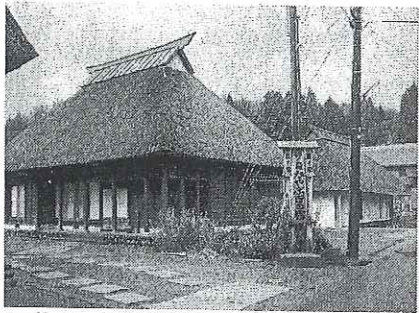
新潟県の人口は97年の249万人をピークに減少が続いている。10年には237万人となった。そのため県はUJ、新潟県の人口は97年の249万人をピークに減少が続いている。同市は05年5月に、旧3市町（柏崎市、高柳町、西山町）が合併した。生活を営む集落である。その一面に、唯一の宿泊施設となる民宿が2棟あり、いり端での郷土料理と地酒を

心の原風景に惹かれて

人気の高柳地区

Iターンの促進や、二地域居住の拡大など、他都府県から新潟県内への移住者を増やす取り組みを積極化している。そうした中、柏崎市は近年、首都圏などからの移住先として人気が高まっている高柳地区の可能性

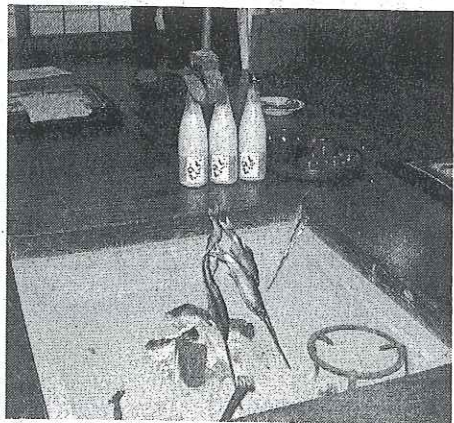
高柳の魅力を代表しているのが「荻ノ島かやぶきの里」だ（写真上）。田んぼを囲んで、築百年以上のかやぶきの民家が並ぶ環状集落で、なつかしい日本の原風景をのびせている。50軒ほどある民家の約半数がかやぶきだが、農家など普通の人たちが現実に



楽しむことが出来る（写真左下）。テーマパークのように観光スポット化していない素朴さが評判を呼び、シーズンにはなかなか予約が取れないほどだ。この高柳の山間地には、「日

本の棚田百選」に認定された3つの美しい棚田もある。まるで江戸時代にタイムスリップしたかのよつな長閑さだ。民話「藤五郎狐」に基づく幻想的な「狐の夜祭」（10月下旬）もある。「県立こども自然王国」や遊園地、キャンプ場、宿泊施設などからなる「じよんのび村」もあって、働くチャンスもある。という

その中の一人、伊藤雅徳さん（47）は、キャンピングカーでの日本縦断旅行中、98（平成10）年に高柳に立ち寄り、そのまま住みついてしまったという。移住の経緯としてはめずらしいケースだと思うが、伺った話も移住とは何か、田舎暮らしの本質を探るうえで極めて貴重なものとなった。



わけて県外からの移住者が少いはずだが増えている。旅の途中で住みつく

（本多 信博）

新潟移住

人口減とどう戦うか

■中

「じよんのび村で食べた、がんもどきのおいしさが運命を決めた」と伊藤さん(写真左)は話す。車で旅行中、以前から知っていた「かやぶきの里」に立ち寄ったら、雪で動けなくなってしまった。

仕方なく(じよんのび村)でアルバイトをしながら、春まで滞在することにした。ところが仕事が延び延びになっ

けですが、最終的には、その決意をするまでにお世話になった人とのつながりが決断させたのだと思います」

役所に相談に行ったときに知り合った、ほぼ同年代のM氏もそうだ。住む家や仕事のあっせんなどの面倒をよく見てくれた。そのとき育まれたM氏との友達付き合いは今も続いている。

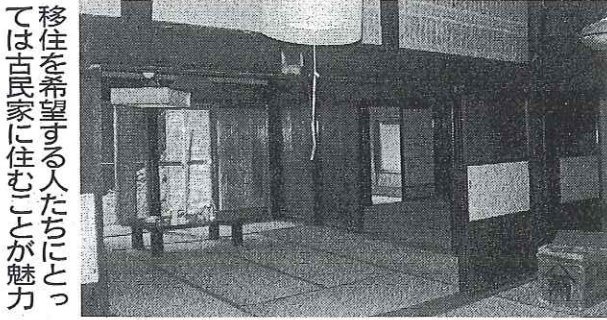
遊び相手がいまません。近所のおじいちゃんや、おばあちゃんはいっぱいいるのですが

中学まではスクールバスで通えるが、高校になると市内に下宿をさせざるを得なくなる家があるのも過疎集落の実態だ。「田舎暮らし」といえば子どもはとっくに独立しているリタイア世代が普通だ



大倉一弥社長(左)と、新潟県地域政策課交流・定住促進班主事の阿部直樹氏

役所も住民も思いは一つ



移住を希望する人たちにとって、古民家に住むことが魅力



「要するに、自分はここ(高柳)と相性が合ったので住むことにしたわたりして、結局定住すること」

その後結婚をし、子供も小学生の男の子が2人いる。仕事は、がんもどきがおいしかった店で豆腐づくりに専念している。村の人たちは親切で、つくった野菜をだまて玄關先に置いていってくれる。

「自分も妻もここでの生活に満足しているのですが、心配なことが一つ。それは、うち以外にはこの部落に子供がいないので、子供は学校からスクールバスで帰ってくると

が、移住者を本当に増やしていくためには、子供の教育環境をどう整備するかが大きな課題になる。

新潟での田舎暮らしを希望する人たちにとって大きな魅力となっているのが、古民家力となっているのが、古民家での暮らしである。築100年以上という建物が多く、中には江戸時代に建てられたものもある。

そうした物件を再生し販売

している建都設計(柏崎市の大倉一弥社長に話を聞いた。――これまでに販売した棟数は、

「ざっと50棟ぐらい。もともと設計事務所として会社をスタートさせたので、大きな家が多い古民家(300㎡以上の物件もある)の再生も得意としている。価格は200万〜800万円程度。これに500万〜1000万円程度の内装を施すことになる」

「土地代はゼロのようなものだから、囲炉裏など昔の建物の魅力に惹かれて購入する。首都圏では特に埼玉県から見にくる人が多い。海がないからだろうか。柏崎は『東京から一番近い日本海』というキャッチフレーズがあるぐらい、東京からでも近い」

――古民家再生を手掛けるようになったキッカケは。

「若い人たちが減少していくので、普通の住宅だけではシリ貧になることが分かってきた。古民家の魅力を残しながら、地震にも強く都会の人でも快適に住める住まいにつくり変える仕事はやりがいもある」

「田舎だから買ってくれた人との付き合いは一生続く。地域再生にも貢献できるので、役所からも感謝されている」

(本多信博)

新潟移住

人口減とどう戦うか

■下

小千谷市も移住・定住促進に力を入れている。

55歳以下のU・J・I・T・A ーン就職者が住民登録をして、民間の賃貸住宅を借りた場合には月額家賃の3分の1(上限2万円)を最大3年間補助する。また、移住のために同市内に住宅を建てた場合には、最大80万円の補助制度もある。

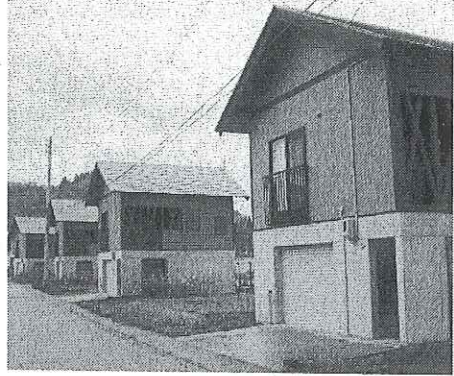
そうした移住者を増やすためには、まずは小千谷市の魅力を知ってもらおうと、さまざまな試みがなされている。

その一つが真人(まこと)町の若柳集落にある農家民宿「おっこの木」である。築160年の古民家を

市が買い取り、昨年6月にオープンした。

古い建物が醸し出す独特の空間と時間は、田舎暮らしを身近に体験させてくれる。地元のお母さんたちがつくってくれた料理は山あいの里で採れた野菜や山菜が中心。その味が忘れられず、リピーター客も増えているという。

◇ 「おじやクラインガル」 ◇



「おじやクラインガル」の滞在型宿泊施設

短期滞在から住む魅力へ

小千谷市の四季が気に入ると話す高橋さん夫妻



速道路のインターからも近いので車なら3時間半で着いてしまいます。月3万3000円の利用料は安いですよ」と

「系図をたどり、いろいろ調べていたら、この辺りの村

のキツカケとしては、かなりユニークなケースだろう。物件は広井氏が「40年不動産業をやってきたが、こんなに大きい家は見たことがない」と驚くほどの豪邸だ。外観は古い12もある部屋のすべてが、今すぐ住めるぐらいきれいにリフォームされている。築100年は超えているという。

ただ、あまりに広いので個人の買い手は見つけにくい。「おっこの木」のように市が借り上げ、公共施設として利用してもらうのも一案だろう。当面は市の空き家バンクに登録する計画だ。

◇ ◇

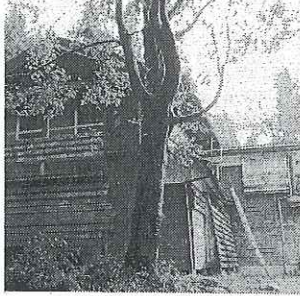
2日間の短い取材旅行だったが、人口減少に悩みながらも本気で地域の活性化を願い、真剣に努力している地元の人たちの心意気に触れることができた。

また県と市、そして住民が一体になって村や町の再生を目指す姿を見て、真の行政がそこにあると感じた。

(本多 信博)

大満足の様子だ。

◇ 小千谷市内にある広勘(ひ



約20年前に購入した古民家の外観は古い(Ⓔ)、12部屋もある室内は今すぐにでも住める状態だ(Ⓕ)



にも祖先が住んでいたことが分かったことが購入の動機になったと話す。田舎暮らし